

トルコ・アンカラ大学での研究留学体験記

自然科学研究科 竹下嘉音

【留学の背景】

幼いころから異文化を体験することや国際協働などに関心があり、大学入学後はオンラインや数週間の留学プログラムにいくつか参加してきました。その中で、語学留学ではなく、何らか自分の力で成果を出す、という環境で海外での滞在をしたいと考えようになりました。様々な方に相談し、複数の選択肢を考える中で、自身の関心のある土壌学の研究室が交換留学生の受け入れや海外大学との共同研究を積極的に行っていることを知り、土壌学を軸とした留学を目指すようになりました。研究室に配属後、指導教員にトルコのアンカラ大学の土壌学研究室を紹介していただき、大学院1年生の9月から1年間、現地での研究活動が実現しました。

【留学先での活動と生活の環境】

アンカラ大学の土壌学研究室に所属し、トルコのアルカリ水田土壌の微生物群集についての研究に取り組みました。アンカラ郊外にある大学敷地内の寮で生活し、毎日徒歩20分ほどかけて研究室に通いました。休日には、各国の留学生と寮でお茶会をしたり、研究を通じて知り合った方のホームパーティーに招いていただいたりと、研究以外での交流を楽しみました。

【印象に残った留学中のエピソード】

研究を進める中で、日本では経験しなかった多くの困難に直面しました。例えば、日本で100円で手に入るものがどこを探しても見つからなかったり、日本では一般的な試薬でもトルコでは手配に数か月かかりました。また、時間の使い方に対する考え方の違いや治安上の制約から、思うように研究時間を確保できないこともありました。こうした状況の中で、自分の「当たり前」がいかに脆いものであったかを日々痛感していました。つまり多くのことが多く、精神的につらい時期もありましたが、支えになったのはいつも人や異文化との交流でした。毎日研究の合間に、先生方や学生とトルコの紅茶を飲み、時には日本の緑茶を振る舞いながら、ひとつの目標の達成に向かう中で同じ考えや苦勞、違う常識や習慣を話す時間は私にとってかけがえのない経験となりました。

【留学を通じて学んだこと】

最も大きな学びは、日本で生きていく覚悟ができたことです。留学前の私は、「とにかく海外に行ってみたい」「色々な異文化に飛び込んでみたい」という思いが強く、日本に対してマイナスなイメージもありました。しかし、トルコでの生活を通じて、トルコという国と人、トルコにいる様々な文化背景を持つ人、彼らからみた日本の姿に触れました。また、自身の当たり前が通じない活動のなかで、私は日本語を母国語とし、日本の文化背景の中に育った存在であることを再認識しました。その過程で、自分の考え方や生き方がより鮮明になり、それを支える国という土台が先人から受け継がれてきたことへの感謝の念も芽生えました。こうした経験から、まずは日本という基盤の上でできることを積み上げることが大切であり、その延長線上にこそ、国際的な生き方があるのだと実感することができました。

【最後に】

語学力、留学資金、研究や就職活動との兼ね合いなど、留学に踏み出したい気持ちときっかけがあっても、それを阻む壁は少なくありません。実際に留学中にも、誰しもが上手くいかないことや想定外の出来事に遭遇すると思います。そんな時こそ「何のために行きたいのか」「自分は何が得たいのか」という原点に立ち返ることが大切だと私は考えています。その結果、留学以外の手段を選ぶことも、また大切な選択です。しかし、やはり頑張りたいと思えるなら、それを応援してくれる大人や仲間は沢山いるのだと、私はこの1年で強く実感しました。トビタテ！留学 JAPAN による金銭的支援とコミュニティ、大学の国際交流推進課や研究科事務室の方々、さらに新潟・アンカラ両研究室の先生方や家族が、大いに背中を押してくれました。私は大変恵まれた環境にあり、とても幸運なことだったと思います。自分自身も歩み続けつつ、今度は応援する側としても、活動していきたいと考えています。



トルコでの土壌サンプリング



国際学会に参加



教授のお子さんの学校で折り紙レクチャー